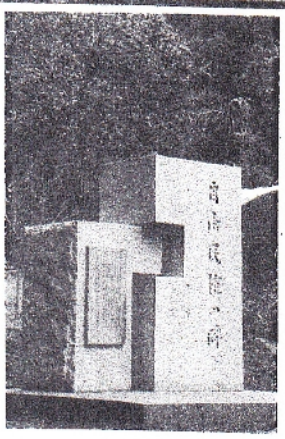

写真上　中島信行書「自由所棲是吾郷」　右　自由民権の碑

自由民権とカンボジア料理で、新年山行格調高く終わる

一月一四日、恒例の新年山行が無事に終わった。町田市立「自由民権資料館」を訪ねた後、民権の森を散策。午後は町田駅に近いカンボジア料理の店「アンコール・トム」で珍しい異国の味を楽しんだ。山口さん、横山さん、設営その他、有難うございました。

［参加者］田村佐喜子・梨羽時春・梅本知榮子・松本恒廣・羽賀克己・渡部温子・鈴木快信・鳥橋祥子・川上進・島田稔・瀬戸英隆・田井具世・川口章子・／羽賀育子・大村悦子

ＣＬ山口悠紀子　ＳＬ横山隆　　計一七名

＊詳しい山行記録は次号に掲載します。

◆寒中お見舞い申し上げます。　事務局一同

緑爽会２月例会のお知らせ

と　き　2月16日（木）１３時～

ところ　山岳会会議室

講師　宮下啓三会員

「増えた山の名、消えた山の名―
東京の近くに存在した山岳密集地域」

スイスアルプス談義に始まった宮下さんの一連のお話の最終章として、日本で一番小さなアルプスのお話です。ご期待ください。**問合せは☎＆Ｆ03-3326-2892 松本 迄。**

12月13日忘年会にて　撮影・小泉義彦　参加者　羽田栄治・松本恒廣　羽賀克己・近藤緑・吉田理一・里見清子・横山隆・鈴木快信・樋口公臣　川上進・中沢喜久郎・島田稔・福原好子・富沢克禮・山川陽一・瀬戸英隆・田井具世・川口章子・中尾千予光・近藤雅幸／元川里美　計２２名

緑爽会報　NO. １０４
‘１２年　1月２５日
発　行
(社)日本山岳会緑爽会
℡　03-3261-4433
事務局
松本恒廣　樋口公臣
夏原寿一
近藤　緑　川口章子
横山　隆　渡部温子

［対談］

井上靖『氷壁』とその時代

東海支部　石原　國利
文芸評論家　近藤　信行

近藤　石原さんとは、井上靖先生をとおしておつきあいが始まりました。きっかけとなったのは小説『氷壁』をめぐるさまざまな事柄です。石原さんと私は同い年ですから、戦後の山登りなど、共通したものがあると思います。

石原さんは中央大学を卒業されてから名古屋大学に就職されました。鈴鹿の岩稜会にお兄さんがおられた関係で、石原さんも岩稜会で穂高を中心としたたくましい山登りをやっておられました。戦後、登山界の輝かしい時代を代表するお一人だと思います。

私は昭和三〇年、早稲田を出て中央公論社に入社。井上さんは「中央公論」本誌に『天平の甍』の連載をはじめられました。担当の先輩、京谷英夫さんの紹介で井上さんのところへ行くようになりました。『氷壁』と『天平の甍』は、ほぼ同じ時代の作品ですね。

昭和二九（一九五四）年頃、石原さんはどうしておられましたか。

石原　昭和二九年はまだ学生でした。日本もまだ貧しい時代で、山へ行くにしてもみすぼらしい服装、装備、飢餓に近い食糧事情という中で、人からはこんな時代に何で山に登るのかと言われたものです。

しかし、登るからには目標がある。望みがある。それに曳かれてムキになって登ったものです。上高地に集まる他の登山者も皆、そんな雰囲気をもった人たちでした。

近藤　岩稜会がお出しになった本で写真集『穂高の岩場』上下（朋文堂刊）がございましたね。皆さんが小さなカメラを持って写しつっ登ったそうですね。あれは、石岡繁雄（岩稜会々長）さんの指令でなさったのですか。

石原　岩稜会というのは、三重県鈴鹿市にある旧神戸（かんべ）中学山岳部ＯＢが母体になった会なのです。神戸中学山岳部が戦後、屏風岩正面壁を初登攀した。その時のリーダーが当時、神戸中学の先生だった石岡繁雄さんでした。

その後、明神岳周辺でもいくつかの初登攀、ルート開拓をしました。東京・関西・中部にいくつもの山岳会ができて、岩壁登攀にしのぎを削っていた頃です。その中で、岩稜会のこれまでの実績が認められたのでしょうか、昭和二八年に朋文堂の社長の新島章男さんが石岡さんのお宅に来られまして、「これまでの山岳案内書は図面によるものだったが、これからは写真が主体になってくると思うから、写真によるルート図集を編纂するように」と依頼されたのです。

それを引き受けて石岡さんが、会員に穂高の全ルートの写真を撮らせて本にしたのが

写真　語り合う近藤さん（左）と石原さん（右）

『穂高の岩場』上下二巻だったのです。

近藤　岩場のどこに何があると細かい部分が出ていて、たいへん勉強になりました。涸沢を中心として滝谷まで含めて素晴らしい本だと思いました。

石原　昭和二九年から三年間くらいは、熱中して取り組みました。みんな写真に関しては素人で、カメラを渡されて「これで撮ってこい」と言われて（笑い）。今でいう現場写真ですね。工事現場で建築屋さんが写真を撮る、あの感覚で撮ったものでした。

ナイロンザイル事件

近藤　井上靖の『氷壁』が今日のテーマですが、私が編集者として最初に企画した山の本は、深田久弥さんの『ヒマラヤー山と人』でした。その本の書評を井上さんにお願いしたのです。それが「中央公論」に掲載されて、それがきっかけになって『氷壁』の中にも深田久弥訳のデュプラの詩が出てきます。「この間、井上さんが使わせてほしいと言って家に見えた」と、深田さんからも聞いていました。松濤明の『風雪のビバーク』も小説の中でうまく使われていますが、なんといっても話の中心にあるのは、石原さんご自身が遭遇された「ナイロンザイル切断事件」ですね。その経過をお話しください。

石原　私たち（石原・澤田栄介・若山五朗）は昭和二九年暮れから三〇年正月にかけて前穂高の奥又白という谷に入って前穂高東壁の登攀を目指してキャンプをしていました。一月一日、三人が積雪期未踏の東壁を完登する目的で取り付きました。頂上直下で一晩ビバークし、翌二日朝頂上に抜ける直前にナイロンザイルが切断して一人（注・石岡繁雄の実弟・若山五朗一九歳）が死亡するという事故が起こりました。それも全く理解出来ないようなザイルの切れ方でした。

私たちが救援されてから後も、前年末に東京の東雲山渓会という慶応大学（立川高ＯＢ）の登山グループが明神岳で９ミリのナイロンザイルが切れて重傷を負う事故がわかり、また私たちの遭難のとき救援に来ようとした大阪市立大学のパーティが北尾根三峰を登ろうとしてスリップ、11ミリのナイロンザイルが切断、幸い雪だまりに落ちたために軽傷ですんだということもありました。三件続けてナイロンザイルの切断事故が起きたために、ナイロンザイルが強いのか、弱いのかが、大問題になったわけです。

近藤　ナイロンザイルが注目されたのは、アンナプルナのフランス隊（一九五〇年）からですね。軽量で、しかも扱いやすいというので、登山用具として画期的だとされました。これで登攀がスムーズに行くと思われたのですね。

石原　それまでは麻のザイルを使っていました。これは雪で濡れて凍ると棒のようになってしまって、非常に使いづらい。ナイロンザイルはしなやかで凍らないので使いやすいというので、夢の登山用具だと皆が飛びついた。その途端に思わぬ欠陥が生じたわけです。

そこで私たちは独自で実験もし、他で起きた遭難例も考え合わせて、ナイロンザイルは岩角に弱いという欠点があることを確信して、それを山岳雑誌にも発表したのです。これが日本の登山界でも大きな問題になりました。大阪大学工学部教授で日本山岳会関西支部長でもあった篠田軍治さんが中心になって、ザイルメーカーである東京製綱蒲郡工場で大勢の登山関係者、報道関係者を前に公開実験をしたのです。私どもが、すでに九〇度の岩角で切断したことを発表していたので、その再現実験を行ったのですが、そのときザイルは切れなかった。さらに四五度の岩角で使っても切れないという実験結果が出て、結果的にはナイロンザイルは従来の麻ザイルよりも何倍も強いという発表になりました。

公開実験から『氷壁』へ

石原　遭難した年の四月二九日の蒲郡の公開実験で、岩角にもナイロンザイルは強いという結果が出て、私たちの遭難に対する発表は間違いであって、自分たちの失敗をナイロンザイルに転嫁しているのではないかという非難が出てきました。私たちはナイロンザイルに欠陥があることを確信していましたので、こんな曖昧なことが登山界に通用したのでは次々に遭難が発生すると非常に心配しました。

そこで篠田先生を訪ねて「このままでは危険だから訂正してください」と何度もお願いをしました。ところが、その席では「ナイロンザイルにも欠陥はある」とおっしゃるのですが、発表はなさらない。それでは登山界の危険は解消されないということで、私たちは一連の経過を「ナイロンザイル事件」という報告書にしまして登山関係者と報道関係者に送ったのです。それが翌年の七月初めです。

今のようなコピー機はありませんでしたから、ガリ版印刷の冊子です。これを二〇〇冊作りました。その一冊が三笠書房の安川茂雄さんから井上先生の手に渡ったわけです。

「ナイロンザイル事件」の報告書を提示する石原さん

近藤　その頃、安川さんは元気いっぱいでした。三笠書房の社員でありながら三笠にいるより朋文堂にいることのほうが多かった（笑い）。それくらい、山に夢中になっていました。自分でも谷川岳のガイドブック（朋文堂マウンテンガイドブック・長越茂雄著）や『谷川岳研究』を書いています。山岳熱の興隆期に大きな力を発揮した人です。

私は安川さんとは昭和三〇年くらいからの付き合いです。彼は井上靖と、その少し後にでた石原慎太郎の二人を軸として三笠書房から文芸雑誌を出そうとしていた。それで私も関心をもっていました。彼には文学というより事件小説的な好みがあったようです。その安川さんが「ナイロンザイル事件」を井上さんに伝え、それが『氷壁』を書く発端になった。当時、マナスル登頂を始めとする登山界の高揚した状況の中で、彼のジャーナリストとしての感覚がわかる気がします。

それで石原さんは、井上さんにお会いになったのですね。

石原　昭和三一年の九月です。石岡繁雄さんという人は元来が物理学者でして、名古屋帝大工学部を卒業後神戸中学の先生を経て、名古屋大学の事務局に就職されました。何をなさったかというと、育英会――学生に育英資金を支給しますね。その一番公平な選考基準を、高等数学などを使って作ったのです。育英会と文部省がそれを勉強するために講師として石岡さんを呼んだのです。それで上京されたときに「安川さんから呼ばれているから君も行かないか」と言われて、一緒に安川茂雄さんにお会いしました。

近藤　その時にはもう井上さんに小説の構想はあったのですか。

石原　安川さんがおっしゃるには、「井上靖さんが、君たちに会いたいと言っているから今から行こう」と、銀座から車で当時先生が

住んでおられた大井町のお宅に伺ったのです。

近藤　井上さんはその当時、歴史小説を書こうとしておられた。またご自身のおじいさんや、軍医だった父親のことも書かれていました。山に関する作品としては、『あした来る人』というのがあります。主人公は山に熱中していて、奥さんに対して「お前との付合いよりも山との付合いのほうが長いんだ」というような男が出てくる。島田巽さんによると、加藤泰安さんがモデルだということです。山を全く知らない井上さんでしたが、『あした来る人』を書くことによって、山に視点を合わせつつあった時期だったと言えます。

取材は全て大学ノートに記入

石原　最初にお会いしたときに、「実はこの一一月から朝日新聞に連載小説を依頼されている。ついては貴方たちのことを材料にして小説を書きたい。協力していただけないだろうか」と言われました。私たちとしても「私たちの言っていることが正しく伝わるのであれば、喜んで協力します」と答えました。

近藤　そのときの井上さんの熱意はすごかった……。

石原　井上先生もまだ四〇代で、若々しい感じでしたね。柔道をなさった方だからがっちりした体つきで、生気に溢れていました。

　私はまだ学生でしたし、しかも九州から出て来て世の中のことが全くわかりません。作家に会うなんて生まれて初めての経験でしたし（笑い）、ましてや文壇なんて世界は全く知らないままで、小説の主人公にされてしまったわけです。

　井上先生は最初に「私には山のことは全くわかりません。全て教えてください」と言われました。私たちは、経験したことをありのままにお話ししました。それを井上先生は、大学ノートに丹念に筆記されて、そのあと必ず読み上げられて「これで間違いはありませんか」と確認されるのです。そういう作業を何回も続けているうちに、最初は作家を何とお呼びしていいかわからなかったのに、自ずと尊敬の気持ちが湧いてきて「井上先生」と呼ぶようになりました。

近藤　井上さんのほうも石原さんのお人柄を大変気に入って、信頼しておられました。現場でみていた私にも、それがよくわかりました。作家と素材の主人公とが、長い年月に渡って見事な関係を続けられたと思います。

　とにかく井上さんの新聞小説ライターとしての力量が『あした来る人』と、それに続く『氷壁』で認められたと言えるでしょうね。いわゆる新聞小説ですから、面白おかしくデフォルメして、恋愛問題をからめながら構成されております。

石原　恋愛問題は私とは無関係です（爆笑）。

近藤　映画で山本富士子がやった美那子夫人ね。いかにも井上さん好みの女性です。読者を喜ばせながら『氷壁』が単なる風俗小説ではなくて、私どもが読んでも「山がよく書けているな」という印象をもったのは、石原さんの功績です。

登山家と知らずに嫁いだ征子（いくこ）夫人

近藤　今日はこの会場に、石原さんの奥さまもお見えでございます。ひとことどうぞ。

　奥さまは『氷壁』が単行本になって、世に出てから結婚されたと伺っておりますが。

征子夫人　主人から「これを読んでくれ」と言って本を渡されましたが、何で私が読まなければならないのかわからなくて、本棚の上に埃をかぶるくらい置きっぱなしにしておきました。詳しいことは何も言ってくれないので、ナイロンザイル事件のことも全く存じませんでした。ある日、お友だちから電話があって「あなたのご主人は石原國利さんでしょう。新聞に出ているわよ」と言われて知ったのです。それから岩稜会の皆さんが大変な苦労をなさっていることがわかったわけです。

　婚約した頃、主人の部屋に山の写真がいっぱい飾ってあるので、写真を撮る人かと思っていました（笑い）。

近藤　蒲郡の公開実験のあと、石原さんはさぞ苦しい立場だったのではないかと思います。岩稜会としては、石岡繁雄さんという人がナイロンザイル事件を大仕事にしてしまったとも言えますね。日本山岳会とも和解するまでに二〇年余りかかっています。

石原　それは重たい荷物でした。

近藤　話を戻しますと、安川氏から材料を持ち込まれた井上さんは、その後、異常なくらいの熱意で山にのめり込んで行きます。「私は何もしらない。一から教えてほしい」と言っていた井上さんですが、早速、穂高に出かけて行きます。といっても涸沢までです。後年、穂高に登ったかのような記述がありますが、あれはウソ。涸沢岳に行って滝谷の一部を覗いたのが、井上さんにとっての最高登頂記録です（笑い）。

石原　『氷壁』を書くに当たって井上先生は、材料はお借りしますが、筋立ては私が作ります」とはっきり言われました。

近藤　書き出しの部分、山から帰った魚津恭太が新宿から銀座に出て行く。そこに親友の小坂がいて、彼を訪ねてくる美那子がいる。小説の伏線が全て凝縮されています。うまいものですね。

石原　私には、自分たちが関わった部分しか判断ができません。文学的な表現については無知に近いので。ただ言えるのは、主人公が山から帰って銀座の料理店に行って酒を飲む。そんな高級な店へ行くなんて当時の私には思いもよらないことでした（笑い）。

強固な意志の人、石岡繁雄さん

近藤　井上さんは岩稜会の石原・伊藤経男・上岡謙一の三人を非常に信頼していましたね。鈴鹿にはたびたび取材に行かれていますが、石岡さんとはお会いになっていたのでしょうか。

石原　石岡さんとは最初だけではないかと思います。石岡さんは自分で筋書きを書いて井上先生に送ったりする人でしたから（笑い）、少し敬遠しておられたかもしれません。私も井上先生に公開実験の真相を書いて欲しいと訴えたこともありましたが、「私が書いているのは小説で、勧善懲悪やドキュメンタリーではないのだから」と困ったような顔をされました（笑い）。

近藤　あるとき、石岡さんが勝沼の我が家に訪ねて見えたことがありました。その足で東京に出て井上さんを訪ねたようです。井上さんから聞きました。詳しいことは知りませんが、石岡さんは井上さんに自分の出過ぎた口出しを謝りに行ったような気がしています。

　石岡さんという人は、かなり自己中心で顕示欲の強い人だったのではありませんか。

石原　そういうことも耳にします。しかし、あの人はナイロンザイルをめぐっての一連のことで、不可能だったことを可能にした人です。そのために大変な苦労をしています。

　蒲郡の公開実験で会社側が岩角に丸みをつけていたことが発覚、実験の不正が明らかになってからも、篠田氏は山日記に書いた「ナイロンザイルは安全だ」という主旨の記述を改めようとしませんでした。日本山岳会が「山日記」を訂正し、お詫びを掲載したのは二〇年後の昭和五一年ですからね。あの粘り強さがなければ誰にもできなかったと思います。

　資料としてお配りした記事は、「中部経済連合会」が本年（二〇一一年）七月の機関紙に載せた石岡繁雄追悼の記事です。東京製綱蒲郡工場を傘下にもつ団体が、実験の不正を書いているのですから、亡くなった石岡さんもさ

石岡繁雄追悼記事の載った中部経済連合会の機関紙を掲げる石原さん

ぞ満足しているでしょう。

近藤　昭和四九年だったと思います。当時は今西錦司さんが会長で、私は常任評議員でした。毎月の理事会に会長も上京しておられましたが、理事会がすむと声をかけてくださって、神保町の「カントリー」というバアにお伴しました。そこで飲んだ後、宿舎の学士会館まで送ることにしていました。

その時に「実は石岡氏のことで困っているんだ」（笑い）と。先ほど言われたように、昭和三一年版「山日記」に篠田さんがナイロンザイルの強度について書いています。石岡さんはそれに反発して篠田さんにも今西会長にも、「山日記」担当の皆川（完二）さんのところへも抗議の手紙が頻繁に来る。今西会長はそれに辟易しておられたのですね。そして「お前は井上靖さんと親しいのだから、何とか解決してくれんか」と言われました。

それで石岡さんに会いに行って、名古屋で一晩懇談しました。その時の私の印象では「我を通す人」だと思いましたね。俺が、俺が、という性格。名古屋の帰り、岐阜に寄って今西さんに報告したのですが、「あいつはうるさい奴だよ」と言っておられました（笑い）。石岡さんの手紙には「罪は日本山岳会にある」とガムシャラに書いてあって、私としたらおつきあいしたいと思う方ではなかったですね（笑い）。岩稜会々長としての石岡さんはどうでしたか。

石原　石岡さんという方は、自分のやろうとすることはガンとして譲らない。それ以外のことでは大らかでした。酒好きで綽名がバッカス。子どもみたいなところがありましたね（笑い）。苛酷な経過をたどった事件でしたが、登山の安全のためだという目的がありましたから、岩稜会の仲間も付いていったのです。

仲間の中にも、昭和四八年に石岡さんが鈴鹿高専で行なった公開実験で、ナイロンザイルの欠陥は衆知されたのだから、そんなに主張しなくてもいいのではないかという意見もありましたが、石岡さんは「それでは結論が出ていない。終了してはいないのだ」と言われましてね。

近藤　昭和五一年、日本山岳会との和解に当たって「山日記」に石岡さんは原稿用紙で一〇枚を超える原稿を送ってきました。小さな「山日記」に載せろというのは無茶な話です。それを私が四、五行ほどに要約して載せたのです。担当の皆川さんと一緒に石岡さんに会って、「簡潔でなくては人に伝わりませんよ」と言って、ようやく承知してもらいました。ご本人はご不満のようでしたが（笑い）。

石原　近藤さんのご尽力で、日本山岳会との和解が成立したとき、正直言って私もほっとしました。

名誉会員問題で再び浮上

近藤　ところがまだお終いではなかった。日本山岳会はまたまた問題を起こしてしまった。それは平成元年、篠田軍治氏を日本山岳会の名誉会員にしたことから再燃したのです。

会長は誰のときでしたかね。

司会　山田会長、藤平・村木副会長でした。

近藤　関西の評議員から推薦があってそれが評議員会を通ってしまったのです。そのとき、異議ありと声を上げたのは石原さんでした。例え大阪大学名誉教授であり、関西支部長として功績があったとしても、ナイロンザイル公開実験で不正があった人を日本山岳会が名誉会員にするとは何ごとだと訴えたわけです。私もこれは正論だと思います。

石原　こんなことがあり得るのかと思いましたね。蒲郡での実験がインチキだったことが明らかになったのに、その実験の指導をした人を名誉会員にするとは、日本山岳会としてあるべきことかと問題提起をしたのです。当事者だから言うのではなくて、日本山岳会としてどうなのか。会の威信に関わるのではないかと主張したのです。

近藤　これは聞いた話ですが、名誉会員に決まったと聞いて、篠田さんは涙を流して喜んだそうですね。

石原　余命いくばくもない状態で、病にふせっておられたようです。関西支部の方は、最後に喜ばせてやりたいと思われたのでしょうが、そういう情実人事が山岳会の中でまかり通ったのは、非常にまずいことだったと思います。ぜひこれは、訂正していただきたい。私は死ぬまで言い続けたいと思います。

問題の「山日記」を掲げる石原さん
（当時「山日記」は岳人必携の手帳だった）

近藤　ナイロンザイル事件というのは、それほど尾を引いているのですね。それを考えると単なる遭難事件ではなくて、会の姿勢を問われることにも繋がります。石原さんの意見に耳を傾けるべきだと思います。

石原　丁度、ナイロンザイル事件が起こったころ、九州では水俣病の問題が起きています。あれも企業が原因を隠蔽したことから始まりました。ナイロンザイル事件は登山界の水俣事件だったと思います。インチキ実験を隠蔽した人が、日本山岳会名誉会員としてふさわしいかどうか考えてみてください。

一般会員は死亡すると会員名簿から抹消される。名誉会員だけは名誉会員名簿として残るのです。日本山岳会はどういう会ですかと言われたときに、過去にこういう方々がいましたと、会の看板として名前が伝わるのです。その名簿で会の品格が決まる。その中に虚偽の実験をした人の名前が入っていては、日本山岳会がいい加減な会だと思われます。私はぜひ取り消していただきたいと、死ぬまで言い続けます。

近藤　いっそ不名誉会員にすべきです（笑い）。

「カエル会」のことなど

近藤　井上さんの話に戻りましょうか。井上さんは軍医であったお父さんの任地であった旭川で生まれて、その後、伊豆に帰されてお祖父さんのお妾さんであった人（後に入籍して戸籍上の祖母となる）に育てられ、沼津中学から旧制の四高、京大と進みますが、留年ばかりしていて毎日新聞社に入ったときは三〇歳近くなっていました。井上さんのお仕事の背景を考えるときに、そういう経歴をどうお考えになりますか。

石原　初めは全くわかりませんで、後になって感じたことですが、『氷壁』や他の作品を読んでも、人間の信頼関係を大切になさる方ですね。例えば、『氷壁』の中に上司の常盤大作という人物が出てくる。普段は会社をサボって山に行く魚津恭太に対して口やかましいことを言いますが、非常に愛情をもって見ているのですね。

近藤　例えフィクションの世界であっても、人間として大切なものを貫こうという姿勢がありますね。新聞記者時代の事件を書いた作品、歴史もの、そして中国に取材したもの、よく調べるのですが、それは学者的な史実ではなく井上さんの感性がとらえた歴史です。

石原　それはよくわかります。

近藤　井上さんはどちらかというと孤独な作家です。戦後出た方ですから、鎌倉文壇にも属さず、中央線沿線の作家たちとも離れています。そのかわり、ご自分の仕事を通して知り合った人たちを非常に大事にされましたね。山本健吉さんや杉森久英さんのような作家もいれば、平山郁夫、生沢朗さんのような絵描きもいたし、各社の文芸記者も、安川さんや石原さんのように取材を通して親しくなった人たちもいた。われわれが「氷壁御殿」と呼んだ世田谷の井上邸では、何かにつけてよく飲みましたね。お正月なんか、先生はいくら飲んでも端然としているのに、記者連中は「飲めや歌へ」の大騒ぎで、奥さまはじめおうちの方は大変でした。

　みんなで毎年秋には涸沢へ行きましたね。

石原　「カエル会」の穂高山行――あの忙しい先生が、よく毎年、時間をとってくださったと思います。カエル会という名前は、『氷壁』の一場面で魚津がかおるをつれて穂高に入るとき、新緑の明神池からカエルの子がいっぱい出てくる、あの光景から付けたのでしたね。

近藤　命名者は朝日新聞学芸部の森田(正治)さんです。満場一致で決まりました。

　安川さんが最後に参加したとき、彼は晩年、アル中で、ウィスキーが離せない状態でした。足も弱くなって、石原さんや僕らが涸沢から北穂を往復して帰って来てもパノラマ新道の登りみちで、先に下山した一行から遅れてまだ酔っぱらってぐずぐずしていた。「先に行くよ」と声をかけて上高地におりたのですが、夜になってもまだ戻ってこない。井上さんに「迎えに行きましょうか」と言ったら、「行かなくていい」というんです。あれには驚いた。

石原　あれは私が進言したのです。井上先生も「救援隊を出そう」と言われたのですが、私が「安川さんはちゃんと羽毛服を着ているし、もう下には降りているのだから、一晩くらいの寒さには耐えられます。救援隊を出したら、一廉の登山家として却って気まずい思いをなさいますよ」と言って止めさせたのです。思ったとおり、風の来ないところでビバークして、翌朝、帰ってきました。

５０名の参加者が会場を埋め、盛況だったＪＡＣ集会室

近藤　そうだったんですか。私は井上さんも案外冷たい人だと思っていました（笑い）。

　カエル会の山行には作家やジャーナリストに交じってご贔屓の銀座のバア「葡萄屋」のママや女の子も一緒に来ましたね。徳沢で山本健吉さんが宗匠になって句会をやったりしました。なんと一席は「葡萄屋」の女の子だった。“氷壁やわが黒髪のザイル取れ”だったかな（笑い）。あるとき、新田次郎から徳沢園に電話がかかってきた。「せっかく銀座に出てきたのに、ママも女の子も上高地に行ってしまって誰もいない」と怒っているんです。焼きもちを妬いたんでしょう（笑い）。

　井上さんの文化勲章受章のとき、徳沢と松本で盛大に祝杯をあげたことを思い出します。

　井上さんには「ただ穂高だけ」という文章があります。それほど『氷壁』には思いをもっておられたんですね。

石原　平成三年に先生が亡くなられてからも、「カエル会」は奥さまやご子息の修一さんを囲んでしばらく続きましたが、次第に亡くなる方が出て来て、昨年は世話役だった高野昭（元読売新聞文化部長）さんも急逝されて、これからどうなるのか。世田谷の井上邸の一部（書斎・応接室）も取り壊され、先生の生地、旭川に移築されることになりました。

　今思うと、井上先生のお陰で沢山の方とおつきあいができたのは、私にとって生涯の喜びであったと思います。

近藤　それではこの辺で終わります。（拍手）

会場からの発言

司会　この際、何かご質問がありますか。

発言Ａ　九州出身の石原さんと鈴鹿の岩稜会との接点についてお聞きしたいと思います。

石原　私の兄が大正の生まれで、戦時中は山口高等商業学校にいて、穂高に入ったりしていました。石岡さんと兄は山で知り合っています。その後、兄は九州帝大に入りましたが、戦後、石岡さんが岩稜会をつくるとき、兄も誘われて入りました。私は、その兄を訪ねて穂高へ行って、岩稜会の若い人たちと親しくなって入会したのです。

発言Ａ　九州におられて岩稜会に？

石原　学生時代は東京にいましたから。穂高に通うようになるのは、上京してからです。

発言Ｂ　井上先生の作品は沢山ありますが、男性が読むと非常に魅力的な女性が描かれていますね。あの発想はどこから出てくるのでしょうか（笑い）。

近藤　井上さんは自然主義作家のようにあからさまには書きませんが、いろいろな人生体験はもっている方だと思います。井上さんの女主人公をみていると、聡明で表面的にはさらりとしているが、内に非常に情熱的なところがある。その辺が井上さんの好みの女性でしょう。実際におつきあいのあった女性を私も知っています。読んでいて思い当たることがいろいろあります。

発言Ｃ　篠田さんの名誉会員推薦の問題ですが、前の年にも関西支部から候補に出されて、東海支部の評議員が反対して流れています。翌年、東海支部の評議員が任期満了になったときに、留任した関西支部評議員から再度出されて通ってしまったのです。

石原　歴史ある日本山岳会の看板に「篠田博士バンザイ」と落書きを書いたような気がしています。

近藤　篠田さんは企業に踊らされたのでしょうね。

石原　そうかも知れません。しかし責任者だったのですからね。事実がわかったら、すぐに訂正すればよかったのです。何度も言うようですが、名誉会員のままでいいものかどうか、真剣に考えていただきたいと思います。

司会　それではこれで。長時間有難うございました。（記録　川口章子・近藤緑／写真　小泉義彦）

【忘年会講演原稿】

ブータンの人と山 その①

山川 陽一

長い間、わたしにとってブータンは遠い憧れの地であった。なぜブータンなのかと問われても、それは「なんとなく」としか答えようがない。しいて答えを探せば、「原生自然への憧れ」といったものだと思う。日本でも、わたしが好む場所はと問われると、槍や穂高、剣岳など一級品の高峰をさておいて、どうしても、白神山地や屋久島の奥地、毛勝・猫又の連山、羽後朝日岳など、今なお、登山道も定かでない原生の自然が息づいている場所が思い浮ぶ。

そんな、ブータンが一気に身近になったのが、5年前、日本山岳会でローツエの麓にあるイムジャ湖に氷河湖調査に行ったとき以来である。このときは、慶応大学の福井先生の調査を日本山岳会でお手伝いするということで、自然保護委員会と科学委員会が共催し、わたしが総隊長を務め、総勢25人が2班に分かれて、エベレスト街道沿いの流域調査をしながら、決壊の危機にあるといわれるイムジャ湖まで往復したのだが、帰国後、同行の有志が集まって、"次はブータンだね"という話しになったのである。ネパールヒマラヤの調査は慶応の福井先生のグループが受け持ち、ブータンヒマラヤは名古屋大学を中心としたグループが受け持つという住み分けができていて、JICAの支援を受けながら日本からブータンに学術調査隊を送る検討が進んでいた。日本山岳会もその一員として加われないか画策したのだが、結果として、残念ながら実現できなかった。

しかし、これが契機となり、わたしの心の中で長い間くすぶり続けていたブータン熱が再燃して、一旦燃え上がった火は収まりがつかず、本気でブータン行きの検討を始めることになる。手始めに、ブータン入門編として2009年6月、ヒマラヤ観光（株）のブータントレキングのツアーに参加して、チョモラリ峰の麓まで行ってきた。そして、翌年2010年秋、仲間を募って、ブータンの北辺200キロを20日かけて歩くことになった。今日お話しするのは、そんな2回のわたしのブータンの旅の記憶である。

ブータンという国

今年の10月ブータンの第五代国王が挙式し、1ヵ月後の11月15日、国賓としておふたりが来日された。ハンサムな国王と美人で素敵な王妃は日本国民に親しみを持って迎えられ、ブータンという国が一躍脚光を浴びた。すでにかなり有名になっているGNH（国民総幸福量）ということばも再脚光を浴びて、つい先日、日本でも国として日本流GNHの指標作りをおこなうことが発表されたのは、耳に新しい。

ブータンは、国土面積が九州くらいの広さで人口がわずか70万人の小国である。地理的には、南にインド、北に中国という大国にサンドイッチのように挟まれている。歴史的には、幾度か チベット族との小競り合いが繰り返され、常に侵略の脅威に晒されてきた。西方ネパールとブータンの間の小さな隣国シッキム王国は1975年インドに併合されて消えてしまった。そんなアジアの小国が、一躍国際的に脚光を浴びるようになったのが第四代国王の時代だった。それまでの鎖国政策を改め開国に舵を切った三代目国王のあとを継いで、1972年16歳の若さで王位についた第四代国王は、現在の第五代国王にバトンタッチするまでの間、国力を測る尺度としてのGNHの提唱、民族衣装の着用、王権の縮小と民主化の推進など、国のアイデンティティを高めるための数多くの革新的な政策を進めたことで有名である。国としての自主性に欠けるチベットが中国に取りこまれ、シッキムがインド領になるのを目のあたりにしてきた後進の小国が、厳しい地政学的条件の中で、大国にへつらうことなく胸を張って生きていく優れた術をここに見る思いがする。

ブータンの国勢調査に依れば、国民の97%が、「とても幸福」、「幸福」と答えているのは、だてではない。

環境面に目を向けると、憲法には国土の60%を森林とすることが明記されており、国の基本政策の4つの柱のひとつに「環境の保全と持続的な利用」が掲げられているブータンの環境政策は本物である。

建前だけでなく、それが実感できるブータンの旅は、確かに幸せがたくさん詰まっている。

ブータンの人々

パロ国際空港に降り立つと、お隣の国ネパールの玄関ロカトマンドウに通いなれたわれわれにとって、そのあまりの違いに目を見張る。山の緑、そばを流れる清冽なパロ川の流れ、民族衣装に身を包んだ人たち、美しい格式の建築物、そしてきれいな空気。

ヒマラヤを背にした小国で、地政学的条件がほぼ似通った国同志でありながら、対照的といっていいこの違いはどこから来るのだろうか。街行く人たちも、山村の人たちも、老人も若者も子供たちも、一様にわたしたちに親しみをこめて接してくれるその暖かさはどこから来るのだろうか。

国民の全員が仏教徒であることや、日本人と見間違うほどの顔かたちや体型が余計に親近感を加速させてしまうのかもしれないが、根本的には、GNHを掲げてそれをしっかりと実践する政策をとってきた国王のリーダーシップが大きく寄与しているのだろうと思う。

加えて、歴史的に日本がブータンの国づくりに貢献してきたことが親日感情を良くしていることにつながっているのだろう。その代表例として忘れてはならないのが、日本式の米つくりを指導してブータンで生涯を終えたJICAの職員西岡京治氏である。西岡氏はブータン国王からダショー（最高の人）の称号を送られ、今でもブータン農業の父と呼ばれて親しまれている。

編集後記★対談「井上靖『氷壁』とその時代」の記録がようやくまとまった。石原・近藤両氏のご協力に心から感謝したい。対談の冒頭、司会の松本恒廣さんから、ナイロンザイル事件をめぐっての関係資料の紹介があった。詳しく知りたい人は図書室へどうぞ。★忘年会講演原稿は2回に分けて、新年山行については次号に掲載する。（K）